

平成 19 年度国土施策創発調査

広島県における集落・コミュニティ実態調査報告書

平成 20 年 3 月

国土交通省国土計画局

広 島 県

目 次

概要編

広島県調査の概要

1. 調査対象自治体および地区の概要…………… 1
2. 住民主体の協議・合意形成（ワークショップを通して）…………… 2
3. 集落において検討された取組みの具体例…………… 4
4. ワークショップから得られたもの…………… 7
5. ワークショップの効果…………… 7

本編

第 1 章 調査の概要

1. 国土施策創発調査全体の概要…………… 8

第 2 章 広島県における集落ワークショップ調査

第 1 節 集落ワークショップ調査の概要

1. 集落ワークショップ調査の目的…………… 9
2. ワークショップの概要と特長…………… 9
3. 集落ワークショップ調査の流れ…………… 10

第 2 節 調査対象自治体・地区の概要

1. 調査対象自治体の概要…………… 11
2. 調査対象地区の概要…………… 14
3. 調査対象地区の位置図…………… 17

第 3 節 各地区におけるワークショップの状況

1. ワークショップ説明会…………… 18
2. 分散会 1（打梨・那須・吉和郷地区地域づくり座談会）…………… 19
3. 分散会 2（坂原・布原・大井地区地域づくり座談会）…………… 27
4. 分散会 3（空谷地区地域づくり座談会）…………… 36

第 4 節 ワークショップから得られたもの…………… 43

- 参考資料…………… 44

概 要 編

広島県調査の概要

1. 調査対象自治体および地区の概要

広島県の北西部に位置し、島根県と接する安芸太田町（平成16年10月1日に加計町、筒賀村および戸河内町の三町村の合併により発足）の打梨・那須・吉和郷地区、坂原・布原・大井地区、空谷地区の3地区を対象とした。なお、安芸太田町は、広島市中心部から車で約1時間の圏内にあることから、広島都市圏の観光・レクリエーションエリアとして、都市住民との交流が多い地域である。

打梨・那須・吉和郷地区は、打梨・那須・吉和郷の3集落で構成され、52世帯、人口102人、高齢化率は58.8%である。集落別にみると、打梨は5世帯12人で高齢化率は91.7%、那須も12世帯17人で高齢化率94.1%と、ともに非常に小規模化・高齢化の進んだ集落となっている。3集落共同で「結（YUN）プロジェクト（YUNは3集落の頭文字から）」に取り組んでおり、これらの取り組みを通じて住民相互の意思の疎通を図り、山里に活力をよみがえらせようと活動している。

坂原・布原・大井地区は、坂原、布原、大井の3集落で構成され、40世帯、人口76人、高齢化率は68.4%であり、他の2地区と比較して高齢化率が最も高い地区となっている。布原は5世帯6人で高齢化率は83.3%、大井も5世帯10人で高齢化率70.0%と、ともに非常に小規模化・高齢化の進んだ集落となっている。なお、3集落は合併に伴って1つの行政区に再編されたため、3集落での地域づくり活動は始まったばかりである。

空谷地区は、5集落で構成され、36世帯、人口66人、高齢化率は60.6%であり、他の2地区と比較すると、世帯数、人口が最も少なくなっている。集落別にみると、横山集落以外は10世帯を下回っており、人口も香郷集落、名護木集落で10人以下となっている。特に名護木集落は2世帯3人でうち2人が65歳以上という状況である。また、空谷地区は、近年では地域の再生を目指した「空谷を考える会」が結成され、様々な地域づくり活動が取組まれている地区である。

図 安芸太田町の位置

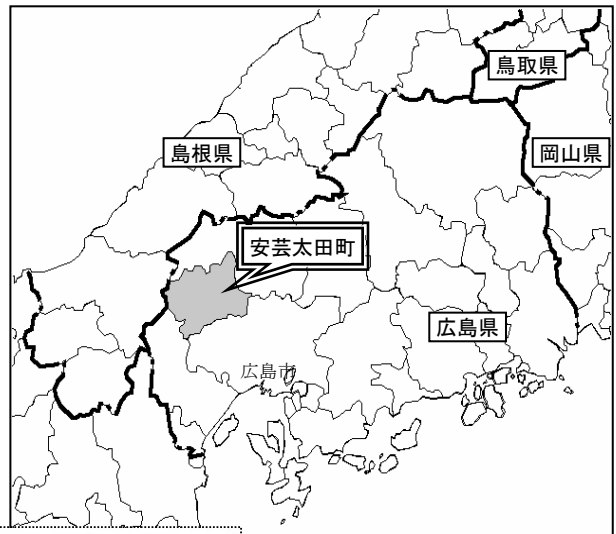


図 調査対象集落の位置

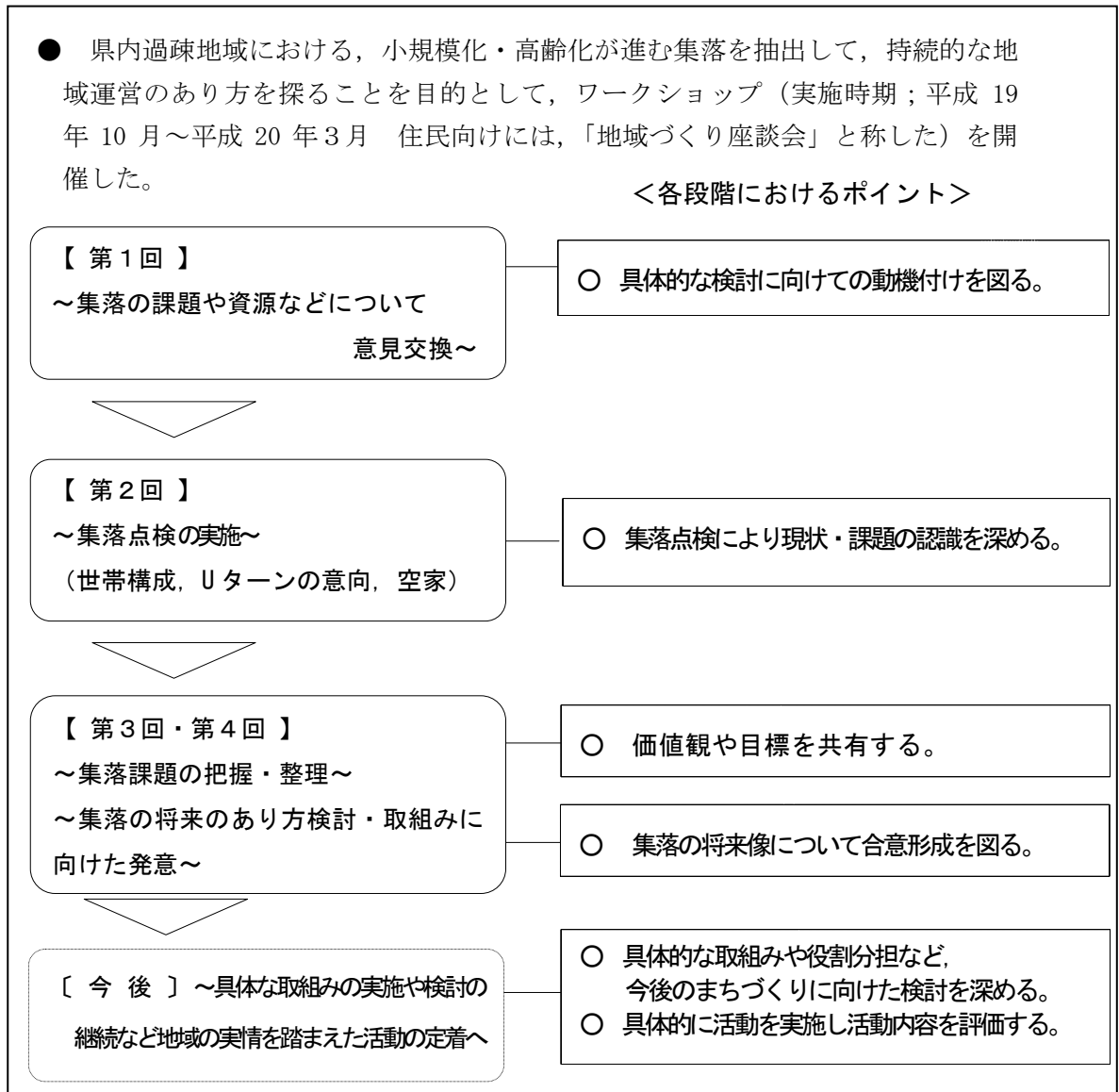


2. 住民主体の協議・合意形成（ワークショップを通して）

1) ワークショップの概要

【分散会（地域づくり座談会）

（調査対象集落3地区）】



2) ワークショップの有効性（住民協議・合意形成に向けて）

小規模化・高齢化が進む集落において将来に向けたあり方を検討する場合には、集落の現状の正確な認識と住民相互が集落情報を共有化すること、そして集落住民の意向を踏まえた合意形成が不可欠である。

合意形成を図るための取組みの第一歩としては、座談会やワークショップを活用した住民参加による集落点検が有効であった。

なお、地域づくり座談会などの進行に当たっては、地域を熟知した町の地域担当職員（地域担当制）や外部進行調整役（ファシリテーター）が関わることによって、集落の潜在的な意向を引き出すことが可能となった。

① 「議論する場」の創出

ワークショップに参加した住民から、「これまで、こうした率直な議論の場がなかった。

そのため、集落点検などを通じて地域の現状を把握しながら将来の姿を探ることが良かった。」という意見が多く出された。これまで課題を議論する場が少なかった地域においては、この度のワークショップが、本格的に地域の課題を出し合い議論をしていくきっかけになった。

一方、これまでに活動実績がある地域も、これまでの活動を一定程度振り返ることができた。



② 集落点検の効果

地域の代表者を含め集落住民が参画し、集落の世帯構成、有する資源等を地図に記入し、集落の現状を洗い出すとともに、Uターンの見込みや、空家、土地利用（耕作放棄地など）の状況などを点検し、集落の将来像（人員構成等）を予測した。



この、集落点検作業により、それまで感覚的に捉えていた集落の現状が客観的に把握でき、Uターンが見込まれる子ども世帯の数も限られるなどの、集落の厳しい現実が理解できたとの意見がみられた。

集落点検によって、地域の現状等について、住民が共通認識を持つことができ、合意形成に向けたきっかけとなった。

③ 集落課題の把握と実情に応じた提案

集落点検により明らかになった集落の客観的な状況と将来像の認識を通じて、一人ひとりの気づきや住民相互の価値観の共有が促され、積極的で主体的な意見や新たなアイデアの提案が促された。

具体的には、「集落連携による取組み」「集まってグループホームをつくりたい」など、地域の実情に応じた提案が出され、一定の合意形成が図られた。



④ 取組気運の高まり

今回のワークショップが今後の取組のきっかけになったとの声が多く出されたほか、継続的な取組の気運が高まったとの意見もあった。

特に、「具体的な取組方策を検討するため、参考となる事例を学習したい。」など、発展的な意見にも繋がった。

さらに、今後の自主的な取組に関するたたき台ができ、気運や意思統一もある程度行われた。

3) ワークショップの進め方について

当初は、参加者の硬さが抜けきれず、多人数の中で意見が出しにくい様子もあったが、小グループによる議論の時間を確保するなど、話しやすい場づくりに努めるにつれ、次第に多くの住民から意見が出るようになり、住民間の意思疎通が図られた。

また、座談会などの進行に当たっては、地域を熟知した町の地域担当職員（地域担当制）や外部進行調整役（ファシリテーター）が関わることによって、いつもは議論できない内容についても本音の意見が出されるようになるなど集落の潜在的な意向を引き出すことが可能となった。

3. 集落において検討された取組の具体例

1) 集落間連携について（集落相互の連携強化）

集落機能を維持していくための仕組みとして、隣接集落間の連携により活路を見出す取組が検討された。

これまで集落間で連携した経験や実績が乏しい場合には、どのように合意を形成し取組に繋げていくかが課題となるが、この度のワークショップを通じた調査の事例では、取組みの大小に拘らず新たな関係性を構築することを念頭に置き、旧来の慣習に囚われない新しい取組みを複数集落の連携により始めていくことが合意された。

複数の集落が連携した「子供世代や出身者を招いての納涼祭」などの開催をきっかけとして、新たな関係性の構築を図ろうとする取組が進みつつある例もある。

● 打梨・那須・吉和郷地区で検討された具体例

○ 3集落の連携促進

小規模化が特に進んだ集落への対応として3集落の連携が急務であり、集落間の連携を深めるため、相互に触れ合うような交流事業（「ひまわりの里づくり」など）の取組が必要。

また、お盆の時に子ども世帯や他出者にも声を掛けて、3集落合同での納涼祭を開催するなど、取り組みやすい試みを行うことにより、他出者との関わりの機会を創る視点も重要。

2) 地域内の支えあいの促進

小規模・高齢化が進んだ集落においては、安心・安全な暮らしができるような環境の整備について、関心の高さが伺えた。

また、地域内で肩を寄せ合って暮らしたいとの意向も強く、将来の構想として地域の人が集まって暮らすグループホームなどをつくることが提案され、今後も引き続き検討が継続されることが合意された例もある。

●坂原・布原・大井地区で検討された具体例

○安心・安全な地域グループホーム構想の検討

- ・安心・安全な地域グループホーム構想について、引き続き、話し合いを継続することとし、取組事例の視察を行うなど、具体化に向けた取組みを進める。

○地域の支えあい活動の試行（一人暮らしの高齢者の方への声かけなど）

- ・一人暮らしの高齢者の方への声かけや安否確認のため、毎朝起床したらカーテンを少し開ける申し合わせを広げるなど、簡単な取組みから始めることとする。
- ・住民が助け合って暮らす仕組みを探るため、坂原コミュニティセンターにおいて共同炊事などを行うなどの「お互いの助け合い」等の取組みを検討することとする。
- ・みんなで集まって交流する機会として「サロン」を開催することにも取り組みたい。

3) 担い手不足への対応（出身者による機能補完）

広島県の県土構造は、過疎地域と沿岸部の人口集積圏とが比較的近接しており、また、公共交通や高速道路の整備などにより相互のアクセス性についても一定程度確保されている。

また、集落点検の実施により、近接する沿岸部の人口集積圏に多数の他出者が居住しており、これらの条件を活かし、地域の応援団（出身者の会）を組織して、定例的に草刈などの集落機能を補完している例や、都市の学校教育機関等との連携活動の例も確認できた。

また、今回のワークショップが契機となって他出している子供世代や出身者の会等との連携を強化しようとするなど、対応に工夫を講じようとする動きがある。

このように、機能によっては他出している子供世代や出身者の会等との連携強化により維持・補完される場合もあることや、期待感もあることから、今後は多様な担い手による集落機能の補完の枠組みについても可能性が伺えた。

●**空谷地区で検討された具体例**

○出身者との関わり強化（生鮮野菜の直販を媒介として）

出身者との関わりを深くするため、軽トラ市（生鮮野菜の直売）の試行に向けた検討を進める。

※ 軽トラ市とは「軽トラックに生鮮野菜を積み込み、出身者の多い都市近郊の団地を訪問して、生鮮野菜などを直接販売する試み。」

●**坂原・布原・大井地区で検討された具体例**

○安心・安全な地域グループホーム構想の検討にあたって

構想の実現に向け、様々な意見やアイデアを探るためにも、出身者親睦団体の意見を聞いてみることにする。

4) 担い手不足への対応（外部人材を活用）

若年層や壮年層を中心とした地域の主要な担い手は、集落の小規模化・高齢化の進行により不足している場合が少なくない。

このため、地域内において、会合などの実施を積み重ねることなどにより、集落状況についての認識や集落活動への参画意識を高めながら、地域内部からの人材を発掘すると同時に、二地域居住などによる多様な主体の関わりを期待するなど、外部の人材の活力を得ることを模索する例が見られた。

●**空谷地区で検討された具体例**

○二地域居住者の受入れ方策の検討

・ワークショップで行われた「簡易な二地域居住用施設」についての事例紹介や意見交換を踏まえ、今後も、具体化に向けた検討を継続する。

5) 地域資源の発掘・有効活用について

地域資源の発掘・有効活用については、多くの集落が歴史文化、自然、環境、農林業などの小さいながらも独自の資源を有していることが多いことに着目し、地域住民だけでなく地域外の視点から積極的に『地域資源』を評価することにより、新たな可能性が広がる余地も伺える。

●**打梨・那須・吉和郷地区で検討された具体例**

○未利用資源（廃校等）を活用した都市との交流促進

地域資源として、キャンプ場やルアーやフライフィッシングなどでの太田川の活用を進めれば、都市部からの交流のきっかけとなることもある。具体的には、旧打梨小学校周辺が活用できる。

4. ワークショップから得られたもの

1) 課題の顕在・共有化

これまで、まちづくりのための会合が少なかった地区もあるが、地域で集まりを持ったことにより、地域の現状や課題、将来に向けた方向性などを率直に語り合うことができた。全体として、議論が活発になり、集落の抱える課題等が顕在化し、共有が図られた意義は大きい。

2) 集落将来像の明確化

集落点検等を通じて、客観的に世代構成など集落の将来の姿を明らかにすることができた。このことにより、住民が集落の現状や課題を共通認識とし、集落の将来像を考える土台をつくることができた。

3) 取組方針の具体化

住民相互の意見交換を通じて、集落の将来に向けた様々な提案が出され、具体的な取組みについて検討することができた。

5. ワークショップの効果

1) 集落点検の有用性

自分たちの集落を客観的、現実的に眺め、課題への対応方策を具体的に検討する手法として、集落点検が効果的であることが分かった。今後、こうした手法により住民間で意識の共有を図ることが必要である。

2) 地域担当職員や外部進行調整役の役割

ワークショップの開始当初は、自由・率直な意見が述べにくい雰囲気もみられたが、意見交換の場に、地域を熟知した町の地域担当職員（地域担当制）や外部進行調整役（ファシリテーター）が関わることによって、意見が活発に出され、集落の潜在的な意向を引き出すことが可能となった。